二人の師の人

クワーレンは、あくびをかみ殺して、ドナウト師による狩りの人の講義を聞いた。

狩の村は、どうどうと砂ぼこりが舞い、汗臭く、死んだ獣の匂いが鼻についた。

それは、デイゴンネーからとって来られた、様々な収穫品から放たれていた。毛皮、湯気立つ肝臓、大腿骨、木の実、巨大な虫の足、羽、貝殻、角（つの）、綿、鉄の破片、石灰岩、硝子の塊、小麦、ライライ鳥の卵などなど、ありとあらゆるものが荷車に詰め込まれ、ある場所に向かっていた。

クワーレンたちもそちらへ向かっていた。砂塵にそそり立つ、緑色の建物、デイゴンネー収穫貯蔵庫だ。

ドナウト師は、貯蔵庫が緑である理由を話そうとしたが、先に魔法動物おたくのマウリンが言った。

「魔法動物がね、中身を透視しないようにするためなの！　魔法動物は、緑を見ることができないんだ！」

「えー、森の中に身を隠す魔法動物が多いのは、えー、互いに身を隠すためのもの習性なのだ！」

ドナウト師は、咳ばらいして、主導権と奪還しようと大きな声で言った。
「あそこが緑に塗られたのは、エイネー歴１１２１年のこと」
「ほら、あたしの言ったこと、あってたでしょ！？」とマウリン。
「黙って聞いとらんか。えー、そのときに、ある魔法動物があそこを破壊して、うん、食い散らかしたのが原因で、飢餓に……陥ったことがある。ああー、それが……狩りの大飢饉、という出来事なんだな。えー、それからというもの、デイゴンネー収獲物保存庫は、魔法動物の目に見えない緑色に塗り替えたのだ。えー、これを提案したのは、魔法動物の研究をしていた、私と同類の、師の人らの、提案であって、えー……」
「いいえ、今日は、埃鳥（ほこりどり）の羽は十五ミルにしかならないのよ」
貯蔵庫への通りでは、値付けが行われていた。
「おい、柘榴鮫（ざくろさめ）の卵は希少品一覧に入ってるはずだろ！　もっと高くつけてくんねえと。一人が腕を折ったんだ！」
「知ってるか？柘榴鮫（ざくろさめ）の卵は、血みたいにまっ赤なんだ」
そう言ったのは、隣を歩くチャルーだった。
「君、本当によく知っているよね」
クワーレンが言うと、チャルーは肩をすくめた。「まあな」
クワーレンは、気づいて言った。

「それも、ダーングからでしょ」
「おう」チャルーはちょっと誇らし気な顔をした。
「どうして、フロリラになったの？」思わずクワーレンは訊ねた。
するとチャルーは、ひゃはっ！と笑った。
「だって、あいつ、俺が何才か、ちっとも覚えてなかったんだぜ！　おむつだってほとんど替えたことねえ。だから、いろんな〈育ての者〉が、交代でおむつを交換したんだってよ」
チャルーは、げらげら笑った。「そりゃあ、やめさせられちまうに決まってるよ！」
今晩の宿についたのは、日がまだ完全に沈む前だった。ドナウト師は、驚くべきことを見習いたちに告げた。
「明日は、講義を休みにする。えー、各自、有意義に過ごすように。だが、仕事人たちに迷惑をかけるなよ」
これにより、見習いたちは、夜遅くまで遊んですごした。狩りの村発祥である、肉と米を混ぜた油飯という料理をたらふく食べ、最高の夜を過ごした。
だから、アダという蔓で編まれた浮き寝床に収まった時は、水に落ちる石のように、すぐに眠った。
クワーレンは、悪夢を見る間もなかった。もともと寝不足だったことも重なり、

ぐーぐー寝息をたてた。これが毎日続けばいいのに……。が、

シャインっ！

明るい金属に、クワーレンは目をあけた。鼓動が速くなる。顔の傍に、見慣れぬ巾着があった。

こわごわ手に取ると、「おいっ！」と小声で誰かが呼んだ。

また蜘蛛の顔が、闇に浮かんでいた。クワーレンはがたがた震えた。

「おい、おいっ！」

目を瞬くと、イムサの顔が、上の浮き寝床から、逆さまになって生えていた。

クワーレンは、ため息をついた。

「どうしたの……？」

「それ、とっておけ」イムサは言った。

「……なにが入っているの？」

「金だ」

クワーレンは、びっくりして巾着をもてあそんだ。たしかに、硬貨が入っているが。いったいどこで手に入れたんだ？　金銭はすべてドナウト師が管理しているはずなのに。

「盗んだの？」気づいて、クワーレンは訊ねた。

「ちげえよ。ちゃんと俺のだ。いいか、なくすなよ。菓子にも使うな。万が一の

ときに必要になるかもしれねえからな」

イムサは、すぐに顔を引っ込めた。もう話したくないようだった。クワーレンも、疲れ切っていて、それ以上考えられなかった。

巾着を握りながら、彼は眠りに眠った。

チャルーに、魔法陣を見に行こうと言われ、クワーレンは次の日、静寂草原を訪れた。イムサからもらった謎の硬貨は、こっそり隠しに持っていった。

静寂草原は、デイゴンネーへ通じる魔法陣がある場所で、青々とした大地に、円形の魔法陣が水玉のように散らばっていた。

ときおり、水玉は、ちかっと光った。円の縁に黒い石柱が四つ対になって立っており、それらが光を発すると、中にいる狩りの人が風のように消えるのだ。

この摩訶不思議な芸は、少年たちを戦慄させた。彼らはきゃあきゃあ言って、次はどこの魔法陣が光るか、あてっこした。

「見ろ、あそこに師の人がいる！」

チャルーが言ったのは、一番手前の魔法陣に集まる、白い外衣を着たアベドたちだった。3人いる。その他、見習いまでもいた。

「ここは立ち入り禁止のはずだよ」

クワーレンは、自分たちの腹あたりをよこぎる綱を引っ張っていった。綱には、「危険区域！無断侵入禁止」と書かれた札が下がっていた。

「こっそり入れば、わからねえさ」

チャルーが綱に足を駆けた瞬間、師の人たちがこちらを向いた。

「あなたたち！」

女の師の人が怒鳴った。チャルーとクワーレンは、慌てて退散した。

逃げる途中、チャルーは、げらげら笑いだした。「クワーレン、めっちゃびびってたな！」

「チャルーが一番に逃げたじゃないか！」

「お前だよ！」

「君だ！」

「おーい」

若い男の声に、彼らは振り返った。

さっきの師の人のうち、二人が来ていた。少年たちは、逃げようとした。

「おい！　待てよ！　聞きたいことがあるんだ！」

男の声は、どこか威圧的なものを感じさせた。

だが、チャルーは立ち止まり、「なんすか？」と答えた。

やって来たのは、がたいのよい男と、顔色の悪い女だった。静寂草原で注意し

てきた女とは、違う女だった。

「よお、ぼうずたち。いま、あるアベドを探していてな。君ら、村回りをしているんだろ？」

男は、黒い眉の下の目を光らせて問うた。

「はい、そうっす」チャルーが答える。

「師は、なんという名なの？」

今度は女が訊ねた。髪をあっさりと後ろでまとめ、こけた頬が露わになっていた。

「ドナウト師っす！」とチャルー。

「おお、本当か。それはよかった。どこの宿に泊まっているんだ？」

この男の質問に、クワーレンは警戒した。さっきの静寂草原にいた師の人にも尋ねていたのかもしれない。そして、探していたのはドナウト師のようだった。師の人二人の瞳が、不気味に輝いている。けど、いったい何の用だろう？

「ドナウト師が、どうかしたんですか」クワーレンは小さく訊ねた。

「彼に約束を破られているんだよ。君らにとっても彼は大事だが、俺たちにとっても大事なのだ」

「どこの宿？」

女が冷たくチャルーに迫った。

「『おこじょの瞳』だよ！」

クワーレンは、彼の判断が正しかったのか不安になった。

二人の師の人は、静かに笑みを浮かべた。探していた宝物がついに見つかる、そんな興奮を「ありがとう、金の少年」という言葉に滲ませて、二人は去っていった。

「なんで、宿の名前を言っちゃったんだ？！」

彼らが見えなくなると、クワーレンは小声で叫んだ。

「あん？　教えてって言われたら、教えるだろ」

「ドナウト師は約束を破ったって、あいつらは言った。ドナウト師、なにかされるかもしれないぞ！　第一、知らないアベドに、自分たちが泊っている宿を教えるなんて、不用心すぎるよ！」

「クワーレン、そういうお前は、考えすぎだ。困っているやつがいたら、助けるのが当たり前だろ」

それも一理あるが、クワーレンは落ち着かなかった。あいつら、名乗りもしなかったのだ。

そこへ、だれかが叫びながら駆けて来た。

「クワーレン！　チャルー！」

マウリンだった。どこかで遊んでいたらしいが、その顔には切迫したものがあ

った。

「イムサが！」彼女は言った。「イムサがいなくなっちゃった！」

マウリンは、リリやエネーリスとともに魔法陣と市をまわっていたとき、途中でイムサと合流したのだと言った。

「けど、宿には戻るなって言って、それから帰ってこないんだよ」

マウリンは、せかせかあたりを見渡した。

「どうして宿に戻っちゃいけないの？」クワーレンは訊ねた。

「鼠がたくさん出たんだって！　だから、『二本槍』っていう宿に行けって言うんだよ」

ドナウト師のことが頭をよぎったが、いまはイムサに集中した。

リリとエネーリスは、行き違いになるかもしれないと、『二本槍』で待っているとのことだった。

イムサ捜索隊第一号のマウリンは、手当たり次第に、通りのアベドに声をかけ始めた。

そして、一軒の店の前に集まるアベドたちにも、駆け寄った。

「イムサっていう子を見かけませんでしたか！？」

その店は、狩りの人が使う武器屋だった。集まっていたのはもちろん狩りの人だったが、中には、師の人と見習いもいた。どうやら講義をしていたらしい。

クワーレンは、彼らが、さきほど静寂草原にいたアベドたちだと気づいた。

マウリンが、身振り手振りを交えてイムサの背格好を伝える。「あたしと同じくらいの背丈で、赤茶の髪！」

「あと、目が、いっつも睨んでいる感じだぜ！」チャルーが付け加えた。

すると、「知らねえよ、早くどっか行け」という返事が返って来た。

全員、ぎょっとした。

言ったのは、一人の見習い少年だった。

彼を見たクワーレンは、心臓を刺されたような衝撃を受けた。

蜘蛛だ。

正真正銘。長い手足をぶらぶらさせて、だれかれかまわず、つまんなそうな視線を向ける。

（嘘だろっ。こんなところで！？）

クワーレンは、静かに後退した。

マウリンが叫ぶ。

「なによ！　仲間がいなくなったの！　必死に探してんのわからないの！？」

「声でかすぎだろ。講義、邪魔してんだよっ」

「ちょっと、落ち着きなさい。ベルツゥ、講義は邪魔されていないわ。助けることは意義あることよ、それを理解しなさい。……あなたも、少し冷静になりなさい」

師の人は、マウリンにも顔を向けて言った。

「見習いなら、私たちも注意してみるわ。見かけたら……そうね、狩の村の管理塔に連絡を入れる。もし探しても見つからなかったら、そこも覗いてみて。いい？」

怒りで身を震わせながらマウリンは頷き、チャルーも頷いた。クワーレンは、ゆっくり後退した。

「それと、静寂草原には、大人がいないところで、二度と入ろうとしないことよ」

師の女は、クワーレンとチャルーを見た。少年たちは飛び上がった。どうやら覚えていたらしい。チャルーは小さく「はあい」と言ったが、クワーレンは声が出なかった。

「ばあい、ばああい！」

去り際、ベルツゥは嘲るように言った。

「あいつ、超むかつく！　なんなのっ」

「おい、警告しとくぞ！　お前ら、その黒目の男には近づくなあっ！」

クワーレンは、口から心臓が飛び出そうになった。

「いかれぽんちだぞーっ！　呪い持ちだぞーっ！　呪いがうつっても知らねえぞーっ！」

「え……？　なんの話？」

マウリンはきょとんとする。けれどクワーレンは、振り返ることができなかった。

「すんませーん、誰のことっすかー?!　なに言ってんすかー？」

チャルーは笑った。だが、クワーレンの予想通り、ベルツゥはさらに怒り出した。

「ナッシュ！　わかってんだろ。なんにも言わねえなら、俺がここで証明してやろうか！　お前が狂言者ってことをさ！」

「もうやめなさい！」

女の師の人が鋭く言った。「恥さらしですよ！　よくそんな態度で見習いになれたものですね！」

それ以降のことは、角を曲がったおかげで、聞き取れなかった。

みんなはなんとなく、足早に歩いた。

「あいつ、知り合いか、クワーレン？」とチャルー。

「……知らない」

「でも、さっき……」

「あんなやつどうだっていいよ！」マウリンが噛みつくように言った。「耳にごみ溜まる。早く行こっ！」

彼女は、どんどん歩いた。チャルーは、慌てて追いかけた。

クワーレンは、あまりの恥辱に、体中が燃えるほど熱くなった。みんなの前で丸裸にされた気分だ。ざくざくと、地面を削る。この地面に、憤怒をねじこんでやりたかった。

マウリンが、「どうだっていい」と言ったことがせめてもの救いだったが、ベルツゥを早く自分の中から追い出したかった。

狩の人が住む平屋の家々を訪ね回ったが、イムサはどこにもいなかった。クワーレンは、自分が本当に彼を探したいのか分からなくなってきた。

彼はイムサだ。ベルツゥではない。そんな風に言い聞かせないと納得しない自分に、だんだん疲れてきた。

チャルーは、腹が減ったと嘆いた。クワーレンは、隠しにしのばせてある巾着のこと考えた。これがあれば、昼ごはんをたっぷり買えるが、なにかがクワーレンを押しとどめていた。

『菓子には使うな。万が一のとき、必要かもしれねえからな』

イムサの言う『万が一』とは、いったいなんだろう。思い出しながらクワーレンは、受け流すか、それとも信じるか、その間で揺れた。

イムサ捜索隊は、最後に、藍色の三角屋根をした管理塔を目指した。管理塔の前には、石階段があったが、そこに探していたアベドが座っているのを見つけたとき、チャルーとマウリンは走り出した。

「こんなところで、なにしているんだ？」チャルーがどうでもよさそうに言った。

「別に」とイムサ。

すると、マウリンが彼の前に立ちはだかった。

「あんたねえ、探してもらって、別にはないでしょ！　どこか行くなら、一言いってよ！　魔法動物に攫われたかと思うでしょ！」

「悪い」

イムサは、疲れた声で言った。クワーレンは、そこで、彼の目にくっきりと隈ができていることに気づいた。

「『二本槍』に行こう」

イムサは立ち上がった。クワーレンの傍を通った時、彼は思いため息を吐いた。

「なにかあったの？」

彼が十分離れると、クワーレンは、マウリンにこっそり訊ねた。

「知らないよ。知り合いみたいなアベドには会っていたけど」

「どういうこと？」

「地味な感じの男だった。魔法陣のところで話をしてたけど、そのときは、イムサ、すごい楽しそうだったけどな！」

マウリンは腰に手を当てた。「どーしちゃったんだろうね！」

クワーレンは、巾着にこっそり触れた。

もしかしたら自分は、なにか重要なことを落としてきてしまったんじゃないかと思った。

◆

『おこじょの瞳』の入り口を、あの師の人二人の影が塞いだ。

彼らは、しばらくの間、宿の食堂に引っ込んでいたが、宿を出てきたときには、静かな怒りをたたえる目をしていた。

先に出てきた男の方が、「さっきのぼうずたち、まだ魔法陣にいるだろうか」と女に言った。

「もう探し回るのは、疲れたわ」女は平坦に言った。「〈目〉に探させましょう」

「あの時、ぼうずたちを捕まえておけばよかったな」と男。

「どうかしら。金髪の方は簡単だろうけど、黒髪の方は、警戒していたわよ」

女は、刃のように冷たい横顔を、明かりの灯りはじめた宿に向けた。「ここでドナウトが『資料』を渡してくれれば、こんなことにはならなかったのに」

「師の村まで、待つつもりもないだろ？」

「あたりまえじゃない。ここまで振り回しておいて……。あの男には、責任を取る義務があるわ」

二人の師の人は、白い貫頭衣を揺らめかせ、宿を離れた。

門柱の横に、小柄なアベドが立っていた。大きな肩掛け鞄をかけ、人懐っこそうな笑みを浮かべている。つばの広い大きな帽子をかぶり、その下から、ぼうぼうの焦げ茶の髪が覗いていた。

そのアベドは、手当たりしだいにびらを配っていた。そして少年のような声で、こう言うのだった。

「よお！『魔導師のウソ・ホント集』が更新だぜ?!　みんな買ってくれよな？　え、　いらない？　そんなこと言わずにびらでも受け取って！　びらなら無料だからさあ！」

師の男は、そのアベドに声をかけた。

「タアラ、他のところで仕事をしてくれ」

タアラは、くるっと振り返った。その目と男の目の中には、同じものが浮かんでいた。

「その様子だと、『資料』は受け取れなかったわけだね？」

その声は、さっきの呼び声とは違う、若い女のものだった。

「ああ、困った爺さんだ。……お前には、別の仕事を頼む。見習いたちを探してくれ。見つけたら、どこにも行かないようにしろ。頼むぞ」

「いいよ」

タアラは、ちょっと肩をすくめると、踵を返して駆けだした。

「これでも応じなかったら、どうする？」女は、男を見上げた。

「仕方がないが、奪うまでだ」彼は、黒い眉を上げた。「そして爺さんには、退場してもらうよ」